

## Saddanīti における文法学の位置づけ

渡邊 要一郎

学僧 Aggavaṃsa によって 12 世紀に著述された文法書 Saddanīti (= Sadd) は、スートラ体を用いず、やや冗長な文体を多く用いる第一巻において、自らの文法学の目指す方向性・パーリ文法学の意義を直接述べている。Sadd の性格を論じた Deokar [2012] は、Aggavaṃsa がマガダ語を、サンスクリット化したマガダ語から分別し、「純粋な」マガダ語を記述しようとした点を示している。同論文は Sadd の規定の方向性を明らかにしている点で興味深い。しかしながら、その背後にある、彼が聖典言語をどのように捉え、それがどのように自著に現れているのか、パーリ文法学を含めた「言葉の学問」全般に対する態度、また Aggavaṃsa の著述目的そのものに関してはあまり考察されてはいない<sup>1</sup>。本稿では、Sadd において見られるいくつかの記事をもとに、Aggavaṃsa がいかなる目的を持って自著を著したのかを明らかにしたい。

## 1 Saddanīti における文法学の価値

## 1.1 Saddanīti 冒頭の記述

まず、Sadd の著述目的を考える際に、冒頭帰敬偈直後の詩節を吟味する必要がある。Aggavaṃsa はパーリ文法学文献 Sadd を著述するにあたり、まず次のように著作の意義を述べている。

Sadd 1.14–25 (verses 7–13):

āsavakkhayaḷābhena hoti sāsanasampadā  
 āsavakkhayaḷābho ca saccādhigamahetuko 7  
 saccādhigamaṇaṃ tañ ca paṭipattissitaṃ matam  
 paṭipatti ca sā kāmaṃ pariyattiparāyaṇā 8  
 pariyattābhuyuttānaṃ viditvā saddalakkhaṇaṃ  
 yasmā na hoti sammoho akkharesu padesu ca 9  
 yasmā cāmohabhāvena akkharesu padesu ca  
 pāḷiyatthaṃ vijānanti viññū sugatasāsane 10  
 pāḷiyatthāvabodhena yoniso satthu sāsane  
 sappaññā paṭipajjanti paṭipattim atanditā 11  
 yoniso paṭipajjitvā dhammaṃ lokuttaraṃ varaṃ  
 pāpuṇanti visuddhāya sīlādipaṭtipattiyā 12  
 tasmā tadatthikā suddhaṃ nayaṃ nissāya viññunaṃ  
 bhaññamānaṃ mayā saddanītiṃ gaṇhantu sādhukaṃ 13

<sup>1</sup> パーリ文法学の目的に関しては Deokar [2008: 4–6] が述べられるが、Sadd に関してはそれほど触れられていない。

漏の滅の獲得によって、教えが完成する。また、漏の滅の獲得は、[四] 聖諦の獲得を原因とする (7)。そして、その [四] 聖諦の獲得は、修行実践に依拠していると考えられる。そしてその修行実践は、必ずや聖典学習を拠所としている (8)。言葉の特徴を知れば、聖典学習に従事する者たちには、音節文字についても単語についても混乱が無くなるから (9)、また、音節文字にも、単語にも混乱が無くなることによって、智者たちは善逝の教えのなかの、聖典の意味を知るから (10)、師の教説において、聖典の意味をその通りに知ることによって、智慧を持った者たちは、修行道をたゆまずに実践するから (11)、清らかな戒などの実践を通じて、正しく修行して、素晴らしい出世間法を獲得するから (12)、そのために、それ (= 出世間法) を求める者は、智者たちの清らかな方法に依拠して、私によって述べられる言葉の規則 (saddanīti) をよく理解せよ (13)。

この冒頭帰敬偈の次に述べられる記述は、Kaccāyana (= Kacc) の注釈書の一つである、10–11 世紀に著述された Mukhamattadīpanī (= Mmd) に述べられる、自著の有用性 (payojana) を述べるものに内容上よく一致している。Aggavaṃsa はこれに影響を受けていると思われる。Mmd では、自著の有用性を「表層的なもの」(mukhya)・「発展的なもの」(anusāṅgika) に分ける。前者は説法などの対他的なレベルにおける言語が主題となり、後者は戒定慧の基礎となる、対自的な言語が主題となっている。

Mmd 6.15–30: payojanam pana duvidham. mukhyānusāṅgikappayojanavasena / tattha mukhyappayojanam nāma akkharakosallam pana sampādetvā byañjanānurūpam attham paṭivijjhati ca pakāseti ca atthānurūpam byañjanam uddisati ca uddisapeti ca / yathā pana bhagavā buddhattādīsū catūsū thānesū uppannam parappavādam dhammena niggayha parisacatukkesu vesārajjappatto hoti evam idhā pi katābhiyogo nāmikādīsū catūsū padesu uppannam parappavādam saha dhammena abhimadditvā vesārajjappatto hoti / idam mukhyappayojanam / tam sabbam ekadesanidassanamukhena dassento “vacanattavaram subuddhan” ti āha //

byañjanānurūpam atthassa ca atthānurūpam byañjanassa ca yāthāvato adhigatattā, bhagavatā tesu sutantesu yaṃ “akattabban” ti paṭikkhittam tam parivajjeti / yaṃ “kattabban” ti anuññātam tam samādāya vattati / tato “akattabban me na katam / kattabban me apariccattan” ti paccavekkhato pāmojjam jāyati / pamuditassa pīti jāyati / pītimanassa kāyo passambhati / passaddhakāyo sukham vedayati / sukhino cittam samādhīyati / samāhito yathābhūtam pajānāti / paṭividdhayathābhūto sagga-mokkkhadvayassa bhāgī hoti / idam idha anusāṅgikappayojanam /

さらに有用性 (payojana) には二通りある。「表層的なもの」(mukhya)<sup>2</sup>と、「発展的なもの」(anusāṅgika) と。そのなかで、「表層的な有用性」(mukhyappayojana) というのは、音節文字に対する習熟性を達成して、音に適った意味を理解し、表現し、意

<sup>2</sup> Mmd-ṭ 41.1–2: mukhyappayojanam ti pākāṭappayojanam.

味に適った音 (vyañjana)<sup>3</sup>を示し、示させることである。例えば、世尊は、悟ったことなどの四つの道理に対して生じた他者との討論を、理にかなったやりかたで退け、四つの衆会に於いて無畏たることを獲得したように、これ (= 自著) に対しても努力が為されるのであれば、名詞などの四つの語に対して生じた他者との討論を、理にかなったやりかたで打破し、無畏たることを獲得する<sup>4</sup>。これが「表層的な有用性」である。その「表層的な有用性の」全てを<sup>5</sup>「習熟性のうちの」一部の例示によって<sup>6</sup>示せば「素晴らしい言葉の意義は「読者によって」よく理解される」と考えて述べている。

音 (vyañjana) に適った目的物を、目的物に適った音を、ありのままに獲得することに基づいて、世尊によって、あれこれの經典のなかで、「為されるべきではない」と禁止されたこと、そのことを彼は遠ざけ、「為されるべきである」と認められたこと、そのことを受け入れて行動する。それから、「為されるべきでないことを私は為さなかった。為されるべきことを私は放棄しなかった」と、観察する人に、喜びが生じる。喜んでる人には、歡喜が生じる。その心が歡喜しているならば、人の身体は軽くなる。身体が軽くなった人は、樂を感受する。樂らいた人の心は集中する。集中した人は、ありのままを知る。ありのままを知りぬいた人は、天界・解脱の二つ組の享受者となる。これが、ここ (= 自著) における「発展的な有用性」である<sup>7</sup>。

かかる記述に従えば、Aggavaṃsa にとっては、文法学は經典学習・修行実践に従属するものであり、それ自体で至上の目的の獲得を導くものではない。つまり、文法学それ自体の学習には価値が見出されないことになる。すなわち Aggavaṃsa は、文法学文献を著述しながら、その冒頭において、文法学文献それぞれのものの価値を相対化していると言えるのである。但し、Aggavaṃsa が、ただ単に権威ある Mmd の記述を無批判に韻文でまとめ直しただけであり、実際にその精神に即しているわけではないという可能性も同時に考えなければならない<sup>8</sup>。

<sup>3</sup> Mmd-ṭ 43.12–13: vuttaṃ hi vyañjanasamuccayo tadatthajotako padan ti. ただし vyañjana は「文」と定義される場合もある。Sadd 907.17: atthasambaddho padesapariyosāno padasamūho vyañjanam.

<sup>4</sup> Sadd に並行文章が見られる。Sadd 58.8–9: tathā hi idha katayogehi nām' -ākhyātādisu catusu padesu upapannavādā paravādino jītā va honti.

<sup>5</sup> Mmd-ṭ 42.21: taṃ sabban ti taṃ vuttappakāraṃ mukhyappayojanam //

<sup>6</sup> Mmd-ṭ は akkharakosalla が 16 種の「習熟性」の一部として例示されていると解する。Mmd 41.16–23: kosallan ti ettha ca soḷasavidham hi kosallam: akkharakusalatā / padakusalatā / samuccayakusalatā / liṅgakusalatā / vibhattikusalatā / pubbāparakusalatā / sandhikusalatā / samāsakusalatā / byāsakusalatā / nibbācanakusalatā / āyakusalatā / apāyakusalatā / ādesakusalatā / uggahaṇakusalatā / dhāraṇakusalatā / sampapīdanakusalatā ti // idam soḷasavidham kosallam. tad-ekadesaniddesa-lakkhaṇena niddisanto “akkharakosallan” ti āha //

<sup>7</sup> 類似の記述として Kaccāyanabheda-atinavaṭṭikā 52.18–23: payojanam pana mukhyapayanānūsāṅgikapa-yojanavasena duvidho // tesu mukhyapayanam pana imam kaccāyanabhedapakarānam nissāya sadda-bheda-sāṅkhātā adhippāyam jānitvā saddānurūpam vacanattavaram sayam jānanañ ca param jāpanañ ca // athānurūpam saddam uccāraṇaṃ ca uccāraṇaṃ ca // imam payojanam vuttaṃ // anūsāṅgikapa-yojanam pana sīlādinibbānapariyosānam payojanam vuttaṃ // taṃ dvayapayanam pana bhedan ti pāthassa sāmattō na dasseti //

<sup>8</sup> また、文法学と修行道との関係については Kacc 1 に対する注釈文献のなかに注目すべき記述が見られている。業処 (kammaṭṭhāna) を把握するために、正確な音節文字 (akkhara) の理解が必要で

## 1.2 「言葉の学問」の限界性をめぐる議論

しかし、Sadd のなかでは、この冒頭の偈の態度の通りに、文法学文献を相対化する記述が複数見受けられる。以下、同書に見られる記述を提示したい。

以下の議論は、Skt. āp- f. 「水」に対して、パーリ聖典中では āpo という語形があるから、Skt. とは異なり男性単数形がありえるという Aggavaṃsa の定説に対して、「言葉の学問」(saddasattha) の指針から、女性複数形しか存在しないと述べる反論者との議論の末

あり、そのために世尊は attho akkharasaññāto 「意味は音節文字 [のみ] から生じる」という文章を述べ、それを仏弟子 Kaccāyana が聞き覚え、Kacc 1 として設定した、という Kaccāyanasuttaniddeśa (15c.) に見られる Kacc の杵物語が Pind [1995: 284f.], [1996] に紹介され、また、この杵物語が根本説一切有部律に由来すると指摘される。

Kaccāyanasuttaniddeśa 3.25–35: attho akkhara-saññāto iti vākyam āha. tatha attho akkhara-saññāto ti idaṃ bhagavato mukhapāṭhabhūtaṃ pubbavākyam, na Kaccāyanaena vuttavākyam. tathā hi eko buḍḍhapabbajito bhikkhu bhagavato santike kammaṭṭhānaṃ gahetvā anotattatīre sālarukkhamūle nisinnō udayabbayakammaṭṭhānaṃ karoti. so udaye carantaṃ bakam disvā udakabakan ti kammaṭṭhānaṃ karoti. bhagavā taṃ vitathabhāvaṃ disvā buḍḍhapabbajitaṃ pakkosāpetvā attho akkhara-saññāto ti vākyam āha. Kaccāyanatherena pi bhagavato adhippāyaṃ jānitvā attho akkhara-saññāto ti vākyam pubbe ṭhapetvā idaṃ pakaraṇaṃ katan ti. 「attho akkharasaññāto という文章 (vākya) を述べた。そのなかで、attho akkharasaññāto というこれは、世尊の口から生じた前文 (pubbavākya) であって、Kaccāyana によって述べられた文章ではない。というも、ある古参の比丘が、世尊のもとで業処を掘んで、Anotatta の岸辺にある、サーラ樹の根元で座りながら、生滅 (udayabbaya) の業処を行っていた。彼は、水の上に動いているサギを見て、『水のサギ』(udakabaka) という業処を行っていた。世尊は、それが誤っていることを見て、古参の比丘に指導して、『意味は音節から生じる』という文章を述べた。Kaccāyana 長老は、世尊の意図を知って、『意味は音節から生じる』という文章を、[Kacc の] 最初に設置してからこの小作品を作ったのだから」(下線部であるが、Kaccāyanasuttaniddeśa における他のスッタの解説では、常に iti suttam āha となっていることから、sutta と vākya は対比的に用いられていることが分かる)。

Pind は指摘していないが、Kacc 1 を前文と看做す説の萌芽は既に Mmd に見られる。Mmd 7.18–20: vuttiṃ kubbatā vuttādo gāthādvayaṃ vuttaṃ / sutte kubbatā suttassādo pubbavākyam āradhamaṃ “attho akkharasaññāto” ty apare 「ある者たちは言う。注釈 (vutti) を作っている者によって、注釈 (vutti) の最初に、二つの偈が述べられた。諸スッタを作っている者によって、スッタの最初に、前文 (pubbavākya) として『意味は文字から生じる』[という文章が] 書き始められた、と」。

しかし、Kacc 1 を前文と看做す説は apare 「他の者たち」であり、Mmd 著者たる Vajirabuddhi の説ではないと考えられている。この箇所は以下のように注釈される。

Mmd-ṭ 47.23–29: apare ti ekacce ācariyā // tesam ayam uggahaṇamaggo / — therena pan’ idaṃ pakaraṇaṃ dvikkhattuṃ kataṃ // paṭhamaṃ suttodāharaṇamattam eva // tadā suttādo vākyam āha // pacchā atigūḷhatāya suttopadesassa vuttiṃ akāsi // tadā tassādo gāthādvayaṃ āhā ti // nāyamaṃ sabbasādhāraṇuggahaṇamaggo // yady evaṃ kasmā Nyāse idaṃ vuttan ti // ācariyuggahaṇavibhāvanamukhena attano ācariyamatikattuvīññāpanattham // 「別の者たち、とは、ある師たちのことである。彼らの理解の筋道は次の通りである。『しかし、[単数の] 長老が、この作品を二回書いたのである。最初に、スッタと、例文だけを、そのときに、スッタの最初に『文』を述べた。そのあとに、[意味が] 極めて隠されていて [分かりにくいこと] から、スッタの教示の注釈 (vutti) を作った。そのときに、その最初に、二つの偈を述べたという [理解の筋道を].』これは、全ての [師たちにとって] 共通する理解の筋道ではない。もしもそうであるならば、どうして Nyāsa (= Mmd) においてこれが言われたのか? 師たちの理解の筋道を分析するというを始めることによって、自らの師の考えの作り手を知らせるためである」。

Mmd-ṭ は、この説を、一人の長老が (thera)、二回にわたってこの著作を著したと述べるのであるから、仮に Kacc 1 を前文であるとしても著者が異なることにはならないと思われる。Mmd, Mmd-ṭ においては、Kacc 1 を世尊直説とする説は見出されないが、後代において、Mmd における「前文説」を援用する者たちで、Kacc が一種の「仏の言葉」そのものとなるような杵物語の設定が為されているように思われる。

尾である<sup>9</sup>。

Sadd 116.13–23: sabbam idaṃ hi vacanaṃ tesu tesu ṭhānesu atthavyañjanapariggahaṇe sotūnaṃ paramakosallajananatthañ c’ eva sāsane ādaraṃ akatvā saddasatthamate kālaṃ vītināmentānaṃ sāthalikānaṃ pamādavihāranisedhanatthañ ca sāsanaśātimahanta-bhāvādīpanatthañ ca vuttaṃ, nāttukkaṃsana-paravambhanatthan ti imissaṃ nītiyaṃ saddhāsampannehi kulaputtehi yogo karaṇīyo, bhagavato sāsanaśā ciraṭṭhitatthaṃ. yasmā pana pālīto atṭhakathā balavaṭī nāma n’ atthi, tasmā pālīnayānurūpen’ eva āpa-saddassa nāmīkapaḍamālāṃ yojeśsāma sotūnaṃ asammohatthaṃ, kim ettha saddasatthanayo karissati.

これらの全ての議論 (vacana) は、あちこちの場所で、意味・文字の把握に関して、聞き手たちに、最高の卓越性を生じさせるために、また、教説に尊敬を払わずに、「言葉の学問」(saddasattha) を考えることに時間を費やしている無気力な者たちが、放逸に時を過ごすことを禁止するために、教説が極めて偉大であることを示すために述べられたのであって、自らを称揚したり、他者を貶めるために [述べられたのではない] から、この指針で、信を備えた良家の息子たちは [言語使用の] 訓練 (yoga)<sup>10</sup> を為すべきである。世尊の教えが長く続くために。また、聖典よりも注釈の方が力を持つということはありませんので、聖典の語法のみに従って āpa- という語の、名詞変化表 (nāmīkapaḍamālā) を我々は作る。聞き手たちが混乱しないために、ここにおいて、「言葉の学問」の指針が、一体何を為そうか？

また、「遠くから呼びかける」場合に、-a 語幹名詞の voc. sg. の末尾の母音が延長するという論者に対して、そのような例は Pāli のなかには存在しないと Aggavaṃsa は述べたあとで、次のように議論を終結する<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> この āpa- の性と数をめぐる議論は、Sadd 107.21–116.23 に及ぶもの。また、この議論の結論は Sadd 700.10–13 で簡単に要約される。

<sup>10</sup> パーリ文法学文献において、yoga とは次のように伝統的に解釈される。Mmd-ṭ 42.18–19: akkharapadanippḥādanabyāpāresu yuñjanti etenā ti yogo // ko so // vāyāmo // 「これによって、[人々が] 文字・単語を形成する活動に適するようになるものが yoga である。それは何か？ 訓練である」。

<sup>11</sup> Sadd 校訂者 Smith が既に指摘するように、この議論は Rūpasiddhi (= Rūp) に対する Aggavaṃsa の反論となっている。Rūp 49.16–18: **ākāro vā** [Kacc 243] liṅgassa sambandhī ākāro rassam āpajjate ge pare vikappena, **adūratṭhassālapane vāyāṃ** 「任意に、ā 音が、語幹に結びついている ā 音は、任意に単音になる。ga (呼びかけを示す第 1 格語尾) が後続する場合には任意に、これ (= 短音化) は近くに居る者に対して呼びかける場合においてのみである。」(Rūp-ṭ 38.4–5: adūratṭhassālapane vāyan ti adūre ṭhitassa ālapane yevāyāṃ rassabhāvo)。このような見解は Mmd に見られない。Aṣṭ 8.2.84 dūrād dhūte ca 「遠くから呼びかける場合にも [文の最終母音以下 (ī) に udātta と pluti が起こる (82)]」に影響を受けた記述であると考えられる。

Sadd の議論を簡単に整理する。Sadd では、遠くの男性に対して呼びかける場合には、voc. sg. は、-ā となり、近くの男性に呼びかける場合には -a となると主張する論争相手が見られる。Sadd は、それでは、遠くの人と、近くの人に同時に呼びかける bhavanto purisā などは、どのように理解されるのかと問う。bhavanto purisā というだけで、遠近の人両方を呼びかけることができるのであれば、bho purisa というのも同様に、遠近のいずれをも呼びかけてよいではないかと主張する (Sadd 90.10–26)。

Sadd 92.7-9: idam p' etha vattabbaṃ: kuto nu bho idam āyātaṃ “dūraṭṭhassālapanam” itti: saddasatthato. saddasatthaṃ nāma na sabbaso buddhavacanassopakāraṃ, ekadesena pana hoti.

【定説】また、ここについて、次のことが言われるべきである。「では、君、この延長(āyāta)は何に基づくのであるか?」【反論】「遠くにいる者に対する呼びかけ」という、「言葉の学問」に基づいて、【定説】言葉の学問とは、仏の言葉に対する完全な補助ではなくて、部分的に〔補助となるの〕である。

さらに上記 Sadd 92.7-9 とほぼ一致する記述は、Sadd 110.1-2 にも見られる(但し、下線部 sabbaso が sabbathā と変わっている)。また、その逆に、言葉の学問の肯定的な面を示す際に、以下のように述べられる。この議論は、注釈のなかで二人称代名詞 te を注釈する際に分けて使われているので、tava には 6 格、tuhya には 4 格としての機能しかないとする論者に対する反論である。Aggavaṃsa は、tava, tuhya は同じ意味を持つと論じる。

Sadd 292.13-14: saddasattham pi ekadesato sāsanānukūlaṃ hotī ti paresam anukampāya saddasatthato nayaṃ gahetvā sampadānatthavasena te-me-saddānaṃ “tuyhaṃ mayhaṃ”

更に、教証を引用し、bhagavā, sugata と、同一人物に対して呼びかける場合であっても、-ā/a が混在していることから、対論者の説を退ける (Sadd 90.26-32)。

さらに、実際に発音されることと、-a, -ā といったように、音長 (mattā) の異なった文字に筆記されることは異なることと Aggavaṃsa は述べる。確かに、現実として遠くの人に呼びかける際に、伸ばされた母音 (āyatasara) によって末尾の音が伸びることはあるかもしれないが、それは単に発声上のことであって、音長表記の問題と区別される。というのも、「バラモンたちは、あるところでは、単音の代わりであっても、長音の代わりであっても、伸ばされた母音によって、半分ほど伸ばされた母音によって、極めて伸ばされた母音によって、ヴェーダを唱えているから、筆記することのできない、歌われた母音によって [唱える] ように」(Sadd 91.8-11: tathā hi brāhmaṇā kathaci kathaci rassatṭhāne pi dīghatṭhāne pi āyatena sarena majjhimāyatena sarena accāyatena ca s arena vedaṃ paṭṭhanti, likhitum asakkuṇeyyena gītāsarena viya)。従って、筆記できないようなものであっても、引き伸ばされた母音 (āyatasara) で、音節を現に発音することは容認されるが、文字それ自体を -ā と表記の上で変更を加える必要は無いとして、Aggavaṃsa は延長された母音を筆記することを否定する (Sadd 90.32-91.25)。すなわち、実際に発音された音 (上記の例では、「伸ばされた母音・半分ほど伸ばされた母音・極めて伸ばされた母音」に対応する) は事実上無限に存在するのであるから、それに対応する記号である「筆記された文字」を生成するのであれば、その数は論理的に無限にならざるを得ないためである。

また、更に教証として、実際に遠くから呼びかけているのにも関わらず、voc. sg. が -a となっている反例を指摘する。J IV 447.15-17: putto ca pitaraṃ disvā **dūrato v' ajjhabhāsatha** // āgañchum dovārikā khaggabaddhā / kāsāviyā hantum mamaṃ **janinda** 「そして、子は父を見て、他ならぬ遠くから呼びかけた。『赤茶けた衣を纏った門番が、剣を装備して、私を殺すためにやってきました。王よ!』」(Sadd 91.25-92.7)

そして、本文で述べたように、このような議論の根拠は文法学であるが、文法学は部分的にしか教説の補助とはならないため、聖典の説明を十全に果たすとは言えないと結論付けている (Sadd 92.7-10)。

また、Sadd と同様の記述として、Dhammasenāpati による Kārikā 94: dūrato avhane gīte tatheva rodane pi ca / brūtātimattikā vuttā sabbe te nettha gayhare // 「遠くから呼びかけるとき、歌、同様に、泣声においても、過度な音長を持つ音が話される。[しかし] それらの全てはここにおいて含まれない」がある。

tu atthaṃ saṃvaṇṇayīṃsu, sāmīatthavasena pana “tava, mama” ti; saddasatthe hi catutthī-chaṭṭhīrūpāni sabbathā visadisāni, sāsane pana sadisāni.

『言葉の学問』も、部分的には教説に適している」と考えて、[注釈家たちは] 他者への憐れみのために、「言葉の学問」から方針を採用して、sampadāna (受益者) の意味で、te, me という語を、tuyhaṃ, mayhaṃ と、注釈し、一方で sāmi (所有者) の意味では、tava, mama と [注釈した]。というも、「言葉の学問」では、第4・6格の語形は必ず異なっているけれども、教説のなかでは類似しているから<sup>12</sup>。

上記の記述から明らかなように、Aggavaṃsa は、単独に文法学だけを学習し、文法学の伝統を絶対視することを戒めてるように思われる。あくまでも、Aggavaṃsa にとって、考察の対象となるものは Kaccāyana 等の文法学書や、ましてサンスクリットの文法学ではなく、聖典の言語そのものである。そのように考えると、Sadd は、過去の学説を参考にしながらも、あくまでも、聖典の言葉を正確に祖述し、教説の補助を第一義に目指したものであると考えられる<sup>13</sup>。上記のような態度からすると、Sadd 冒頭で述べられた、文法学文献でありながら、文法学を相対化するという論述方針は常に Aggavaṃsa の念頭にあったと考えてよいだろう。

## 2 自説の相対化

Aggavaṃsa は、「教説の補助」のために Sadd を著述し、文法学の価値を相対化した。これは、かつての文法学文献だけではなく、Aggavaṃsa 自身が著述する文法学書の価値をも併せて相対化することと同義である。この背景には、上座部仏教内の伝統的な言語観が見られている。Aggavaṃsa は「言語上の無礙智」(niruttipatisambidhā) を持たない、悟りに至らない普通の人間の理解能力を相対化し、三蔵の完全な言語上の理解に到ることは有り得ないと述べている。その結果として、Aggavaṃsa は、自著が、不動で無過失なものではないということを幾度となく述べているように思われる。具体例を以下に挙げよう。

<sup>12</sup> Aggavaṃsa は、あくまでも、注釈者は読者への簡便のために、敢えて文法学の方針を用いて、tuyha, tava は便宜的に分けて説明したのであって、tuyha, tava は聖典中では意味上の区別なく用いられるとする (Sadd 291.16–22)。さらに、反論者は、bhattaṃ tava na rucati 「この食べ物君は好まない」といったような文章は、格語尾の変化 (vipattivipallāsa) によって生じたと言い得るのではないかと主張する。しかし、tava, tuyha は、聖典中には全く区別無く用いられるため、Aggavaṃsa はこれを退ける (Sadd 292.25–293.11)。さらに、Aggavaṃsa は、mayhaka 鳥という固有名詞を例にとり、mayha という語が、6格としての機能を持っていることを論証する。mayhaka 鳥は、J III 301.25–26: sakuṇo mayhako nāma girisānudarīcaro pakkam pippalim āruya “mayham mayhan” ti kandati 「mayhaka という名前の鳥は、山の尾根・洞穴をうろつき、熟したコショウに登って、『私のだ、私のだ』と鳴く」に見られるもの。もしも、mayha が、4格の機能のみを持つのだとすれば、この鳥の名前は mamaka となるべきである。言語表現に巧みな世尊が言葉を間違えるはずがないので、mayha という語は6格の機能を含むとされる (Sadd 293.28–294.20)。

<sup>13</sup> これは、後代の文献が述べるところの「Rūpasiddhi は Cāndra 文法に依拠し、Nyāsa (= Mmd) は Kātantra 文法に依拠し、Sadd は聖典に依拠する」という理解 (多分に単純化した図式であるが) を裏付けることになる。Kacc-vaṇṇ 301.28–30: rūpasiddhikārako Candabyākaraṇanissito. Nyāsakārako Kalāpabyākaraṇanissito. Saddanītikārako Pālinissito. Pind [1990: 218] 参照。

## 2.1 分析能力の限界

rājena という語は, rājan- の padamālā 「変化表」のなかに, Kacc, Rūpasiddhi (= Rūp) に従うならば教示され<sup>14</sup>, Cūlanirutti, Niruttipiṭaka<sup>15</sup> に従うならば教示されないとされる。Aggavaṃsa は, rājena という語形は, 調べられた範囲の聖典・古註のなかでは sivrājena, dhammarājena というように, 複合語の末尾にあった場合にしか見られないと述べる。そのために, rājan- の padamālā 「変化表」のなかには組み込まないことを自身の意見として述べながらも, しかし, この場所はよく考えなければならないと述べる。その後, 次のように述べて議論を終結させる。

Sadd 153.31–154.11: Kaccāyana-Rūpasiddhiganthesu pana rājena rājehi rājebhi rājesū ti padāni vuttāni, Cūlanirutti-Niruttipiṭakesu tāni nāgatāni. anāgatabhāvo yeva tesam yuttataro. pāḷiyam adassanato. tasmā etth’ etāni amhehi na vuttāni. pāḷinaye hi upaparikkhīyamāne idīsāni padāni samāse yeva passāma, na pan’ aññatra. atr’ ime payogā: āvutthaṃ dhammarājena ti [SN I 33.24] ca Sivrājena pesito [J VI 492.9] ti ca ... evaṃ pāḷinaye upaparikkhīyamāne rājenā ti ādīni samāse yeva passāma. na kevalam pāḷinaye, porañatthakathānaye pi upaparikkhīyamāne samāse yeva passāma na pan’ aññatra. evaṃ sante pi suṭthu upaparikkhitabbam idaṃ thānam. **ko hi nāma sātthakathe tepītake buddhavacane sabbaso nayam sallakkhetum samattho aññatra pabhinnapaṭisambhīdehi khīṇāsavehi.**

Kacc, Rūp という書物においては, しかし, rājena, rājehi, rājehi, rājebhi rājesu という語が述べられており, Cūlanirutti, Niruttipiṭaka では, それらは伝承されていない。これらを伝承しないことのみがより理にかなっている。聖典には見られないからである。それゆえに, 我々によっても, ここで, これらの語形は述べられなかった。というのも, 観察されている聖典の語法のなかでは, これらの語を, 我々は複合語のなかにもみ見るが, それ以外には見ないからである。【例】「法王によって留められた」, 「シヴィ王によって派遣された者」 ... このように, 観察されている聖典の語法のなかには, rājena などの [語形] を, 我々は複合語のなかにもみ見ている。ただ単に聖典の語法のなかだけではなく, 観察されている古註のなかにも複合語のなかにもみ我々は見て, 他のところ (=複合語後部以外) では [見] ない。そのようであっても, この箇所はよく観察されるべきである。発達した無礙智を持つ, 煩惱を滅した者たちを除いて, いかなる者が, 注釈を伴う, 三蔵から成る仏の言葉における語法を, 完全に考察し切ることができるだろうか。

<sup>14</sup> Kacc 137: nāmhi raññā vā 「[格語尾] nā (ins. sg.) が後続する場合, [rāja- という語の全体が (Kacc 135)] raññā に任意に置換される」とあり, Kacc-v 137 には rājena という語形が提示される。Kacc の注釈書である Rūp もこれに従っている。Sadd は Rūp に先行する Mmd を挙げていないが, Mmd においても rājena の語形は教示されている。Sadd は Suttamālā 巻において, この規則を書き換え vā 「任意に」を削除している (Sadd §316: nāmhi raññā rājinā)。また, Pāṇini は次のように教示する。Aṣṭ 5.4.91: rājāhassakhibhyaḥ ṬaC 「rājan-, ahan-, sakhi- で終わる [複合語の後に] ṬaC 接辞が導入される」。この議論は Deokar [2008: 212f.] にも触れられている。

<sup>15</sup> 現在まで出版されていない文学文献。これらについては片山 [1972], Pind [2012: 100–117] 参照。



すなわち、Aggavaṃsa は、当面の自分の結論を提示しながらも、rājena という語に関する検証を読者に投げかけ、自分自身の提示する結論に拘泥することなく、自身の説に誤りが経験されたのならば、積極的に訂正せよと述べていることになる<sup>16</sup>。

<sup>16</sup> Aggavaṃsa にとって、無礙智を得た者の言葉である聖典テキストの正当性は疑われえないし、そこにおいては言葉づかいの違いも存在しえない。誤りのように思われるのは、分析者の理解能力の問題であるとされている。ただ仏世尊の言葉のみならず、無礙智を獲得した仏弟子の言葉の正当性も同様である (Vibh-a 388: bahum pi uggahetvā pana puthujjanassa paṭisambhidāpatti nāma natthi, ariyasāvako no paṭisambhidāpatti nāma natthi.). Aggavaṃsa は以下のように述べている。

Sadd 301.4-14: Nanu bho hetuyā adhipatiyā atthiyā natthiyā ti ca idaṃ Sāriputtattheravacanaṃ. tena nikkhittatā. tathāgataena hi Tāvatiṃsabhavane desitakāle imāni padāni na santi; evaṃ sante kasmā “Buddhavacanaṃ” ti vadathā ti. —Buddhavacanaṃ yeva nāma āyasmato hi Sāriputtassa tathāgataena nayo dinno. tenā pi pabhinnapaṭisambhidena satthukappena aggasāvakena satthu santikā nayaṃ labhitvā vyañjanaṃ suropitaṃ kataṃ. sabbe hi paṭisambhidappattā ariyā dunniruttiṃ na vadanti. niruttiṃ pabhedasmiṃ sukusalattā. tasmā aññesam avisayo esa ariyānaṃ vohāro ti daṭṭhabbaṃ. 「【反論】いやしかし、hetuyā, adhipatiyā, atthiyā, natthiyā というのは、Sāriputta 長老の言葉ではないか。彼によって [これらの言葉は] 発せられたのだから、というも、世尊が、三十三天において説いている時には、これらの語たちは存在しなかったから、そうであるのに、どうして [これらの語を] 『仏の言葉』だとあなた達は言っているのか。【回答】他ならぬ『仏の言葉』である。何故ならば、具寿 Sāriputta に対して、如来によって [言語使用に関する] 理 (naya) が与えられたのだから、発達した無礙智を持ち、師の如くであり、最上の弟子である彼によって、師のもとから [言語使用に関する] 理が得られ、文はよく育てられたものとされたから、というも、全ての聖者たちは、無礙智を獲得しているから、誤った言語分析をしないからである。言語分析の区別に対して、極めて巧みであるために、なので、聖者たちの言語活動は、他の者たちにとって [理解の] 領域ではないと理解されるべきである」。

ここで問題となるのが、伝統的に仏弟子 Kaccāyana によって著述されたと考えられている (Ap-a 491.17-21, Deokar [2008: 7f.], Pind [2012: 71] 参照) Kacc の正当性である。伝統説に従うのであれば、Kacc は当然、無礙智を得た者によって書かれている訳であるから、彼の記述に誤りは無いはずであるが、Sadd は Kacc の過失を示唆しているように思われる。Aggavaṃsa がどのように Kacc を位置づけていたのかは不明である。一方で Mmd-ṭ は、Kacc スutta に対する注釈のうち、反論 (codanā) が含まれていることに対して、以下のように述べ、Kacc の無謬性を強調している。Mmd-ṭ 49.10-19: nanu pabhinnapaṭisambhidena vigatāsavadosena lokapaññattikovidena mahāsāvakena katattā, sabbācariyānumatattā ca dosāpatatassa satthassa nālaṃ codanā ti // tathā hi //

dosahīnassa satthassa / codanā tu na vijjate /

dosayuttam asatthaṃ ca / nālaṃ ten' idha codanā ti // //

vuccate // nāyaṃ pakaraṇadosāvīkārīkā codanā // kin tu kattuno adhippāyāvīkārīkā ca sissānaṃ buddhisampaññādikā ca // asati hi codanāya saṃhasukhumaññāpāvacaraṇaṃ atigūḥasuttapadānaṃ adhippāyatthādhiḡamo na siyā // sissānaṃ ca codanādhigatānisamsābuddhisamsiddhi ca // tad evaṃ yuttā va tadatthadhipikā codanā ti // 「【反論】発達した無礙智を持つ、煩惱という過失を離れた、世間の言語慣習に熟達した、偉大な弟子によって作られたものだから、また、全ての師たちによって認められているものだから、欠点の無い論書に対して反論 (codanā) は必要ないのではないか、というも、『欠点の無い論書に対して、反論は存在しないから、一方で、欠点があったのならば論書ではない、なので反論は [そもそも] ここにおいては必要ない』と [言われているから]。【回答】答えて言う。この反論は、著作にある欠点を顕わにするものではない。そうではなくて、[論書の] 作り手の意図を顕わにするものであり、学生たちに知を獲得させるものなのである。何故ならば、反論がなかったのならば、繊細で微細な智慧の領分である、極めて深遠なスutta の語の意図する意味を理解することは有り得ないからである。また、学生たちには、反論によって獲得される正しい知の実現が起こる。なので、このように、その意味を示すものなので、反論 (codanā) は全く理にかなっていないのである」。

## 2.2 読者への問題提起

また、さらに Aggavaṃsa は、結論を避け、探求を読者に促すこともある。

Sadd 63.34–35 (verse 17):

Ettha me “appasiddhā” ti ye ye saddā pakāsītā,  
te te pālīpadasesu maggitabbā vibhāvinā 17

このなかで、「よく知られていない」と私によって述べられた語たちは何であれ、聖典の一部のなかに、賢者によって探されるべきである。(17)

Aggavaṃsa は、凡夫である自身の学説が絶対的なものであるとは述べない。あくまでも最終的に説を決定するのは聖典の記述であることを強調する。自身が「よく知らない」と判断した語形は採用されないが、彼自身に見落としがある可能性は注意されていた。また、Cūḷanirutti などの説と Aggavaṃsa の自説が反した場合に、最終的な決定を読者に任せる場合も見られる。

Sadd 287.18–21: Cūḷaniruttiyaṃ tissannannaṃ ti catutthī-chatthīnaṃ bahuvacanaṃ āgataṃ. Niruttiṭṭhake pana tiṇṇannaṃ ti. tāni sātthakathe teṭṭhake buddhavacane punappunaṃ upaparikkhitvā dissanti ce, gahetabbāni.

Cūḷanirutti では、tissannannaṃ 「3の」という、第4・6格複数が伝承されている。しかし、Niruttiṭṭhake では、tiṇṇannaṃ と [伝承されている]<sup>17</sup>。これらは、注釈を伴う三蔵から成る、仏の言葉のなかで、繰り返し繰り返し考察されて、もしも [その語形が] 見られるのであれば、採用されるべきである。

Sadd 269.14–16: tathā purisā ti viya sabbā katarā icc ādi pañcamīekavacananayo pālīādisu appasiddho. Evaṃ sante pi ayaṃ nayo punappunaṃ upalakkhitvā yutto ce, gahetabbo.

同様に、purisā [sg. abl.] という語がそうであるようには、sabbā, katarā という [sabbanāma の] 第5格単数の語法は、聖典などではよく知られていない。そのようであっても、この [Cūḷanirutti に教示される] 語法は、何度も何度も考察されて、もしも理にかなっているのであれば、[「変化表」(padamālā) のなかに] 採用されるべきである。

## 2.3 Aggavaṃsa の理証についての補足

ここで、最後の例に述べられた「理にかなう」(yutta) が示すプロセスに関して補足したい。Sadd 1–2 巻は、各単語の「変化表」(padamālā) の充足を目的の一つとしている。ところが、その padamālā に記載されるべき語形が、全て三蔵・注釈に存在しているとは

<sup>17</sup> Sadd はこの文脈では Niruttiṭṭhake 説に依拠している。

限らない。したがって、見られている語形だけで *padamālā* を埋め尽くすことは不可能である。そのような場合、*padamālā* の充足のために、他の語形からの類推による充足を認めることで、*Aggavaṃsa* は *padamālā* を完備なものにしている<sup>18</sup>。一例を挙げる。

Sadd 336.20–25: *Ettha pan' eke vadanti: vacati vacantī ti ādīni kiriyāpadarūpāni buddhavacane aṭṭhakathā-ṭikāsu satthesu ca anāgatattā chaḍḍetabbānī ti. tan na; yasmā sāsane avaca avaciṃsū ti suddhakattupadāni ca, vāceti vācentī ti ādīni hetukattupadāni ca disanti, tasmā buddhavacanādisu anāgatāni pi vacati vacantī ti ādīni rūpāni gahetabbāni.*

【反論】しかし、これに対してある者たちは議論する。*vacati, vacanti* という動詞語形は、仏の言葉にも、注釈・複註にも、論書にも伝承されていないから、捨てられるべきであると。【回答】そうではない。教説には、*avaca, avaciṃsu* という、純粋な能動態の語 (*suddhakattupada*) が、*vāceti, vācenti* などという使役能動態の語 (*hetukattupada*) が見られているから、仏の言葉などでは伝承されていなくとも、*vacati, vacanti* などの語形は [*padamālā* のなかに] 採用されるべきである。

アオリスト・未完了語尾を持つ、使役形ではない能動態 *avaca, avaciṃsu* という語形は存在し、現在組織使役形の *vāceti, vācenti* が存在するので、使役でない現在組織の動詞である、*vacati, vacanti* という語形は、現に見られてはいないが存在すると看做され、*padamālā* のなかに充足される。このようにして、*Aggavaṃsa* は、直接に見られた語形と、現に見られた語形から推理された語形の両者を、ともに正当なパーリ語として規定している。

### 3 結論

*Aggavaṃsa* は、教説の補助を第一義とし、文法学文献でありながら、文法学文献の価値を相対的に低いものとして宣言した。ただ、この考えは *Aggavaṃsa* 個人の独創ではなく、*Mmd* に既に存在していた。彼は聖典の無謬性と価値を自明のものとしており、その補助を優先する一方で、自身で無謬で厳密な体系を構築することに関して、それほど強い興味を持っていたわけでも、そもそもそれが可能であるとも考えていなかった。何故ならば *Aggavaṃsa* は、聖典の言語を忠実に記述しようとしていた一方で、悟りに到っていない自分自身を含めた文法学者たちが完全に聖典の言語を理解することができていると想定していないためである。そのため *Aggavaṃsa* は、先行する説を要約し、かつ、自らの説を暫定的なカタチとして提示しながらも、反論の余地を認め、最終的な決定を読者の手に委ねている。したがって、読者たちには必然的に過失が内在する自著 *Sadd* を含めた文法学文献だけに依拠するのではなく、聖典の精読によって正しい言語理解に到ることを求められる。換言すれば *Aggavaṃsa* は先行する学説からある程度自由な立場をとり、聖典テキストに裏打ちされた実証的なパーリ文法学の新たな潮流を生み出そうとしていたことになろう。

<sup>18</sup> このような議論に関しては Deokar [2012: 125] に詳しい。

\*とくに注記のないパーリ文献と略号は *A Critical Pāli Dictionary*, ed. by V. Trenckner et al. Copenhagen, 1924- に従った。

\*本研究は JSPS 科研費 15J10793 の成果の一部。

〈略号および使用テキスト〉

- Aṣṭ      *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini.  
Kacc      *Kaccāyana and Kaccāyanavutti*, ed. by Ole Holten Pind, PTS Bristol, 2013.  
Kacc-v    *Kaccāyana-vutti*, Kacc 参照.  
Kaccāyanabheda-atinavaṭṭikā *Kaccāyanabheda-atinavaṭṭikā, Sadd-ñāy-ṭikā-pāṭh*, vol. 3, Rangoon, 1929.  
Kaccāyanasuttaniddeśa *The Kaccāyanasuttaniddeśa*, ed. by M. Medhankara, Colombo, 1915.  
Kārikā    *Saddā-ñāy 15 coṅ pāṭh*, Rangoon, 1964.  
Mmd      *Nyāsa-pāṭh (Mukhamattadīpanī)*, Rangoon, 1933.  
Mmd-ṭ    *Mukhamattadīpanī-ṭikā (Saṃ-pyan-ṭikā)*, Rangoon, 1917.  
Rūp      *Rūpasiddhi*, Rangoon, 1964.  
Rūp-ṭ    *Rūpasiddhi-ṭikā*, Rangoon, 1965.

(参考文献)

- DEOKAR, M. A.  
[2008] *Technical Terms and Technique of the Pali and Sanskrit Grammarians*, Sarnath and Varanashi.  
[2012] “Understanding Māgadhī: The Pure Speech of the Buddha,” *Journal of the Centre for Buddhist Studies Sri Lanka*, vol. 10, pp. 119–135.  
KAHRS, E. [1992] “Exploring the Saddanīti,” *Journal of the Pali Text Society*, vol. 12, pp. 1–212.  
片山 一良 [1972] 「*Nirutti* 類について」, 『印度學佛教學研究』20-2, pp. 836–840.  
PIND, O. H. [1995] “Pali Grammarians: The Methodology of the Pali Grammarians,” *Sauḥṛdyamaṅgalam: Studies in Honour of Siegfried Lienhard on his 70th Birthday*, pp. 281–297.  
[1996] “Saddavimāla 12.I-II and its Mūlasārvāstivādin origin,” In *Saddavimāla: La pureté par les mots*, ed. by F. Bizot and F. Lagirarde, Paris-Chiang mai Phnom penh-Vientiane, pp. 67–72.  
[2012] “Pāli Grammar and Grammarians from Buddhaghosa to Vajirabuddhi: A Survey,” *Journal of Pali Text Society*, vol. 31, pp. 57–121.

〈Keywords〉 Saddanīti Kaccāyana, Mukhamattadīpanī, パーリ文法学, Aggavaṃsa

## The Place of Grammatical Literature in the *Saddanīti*

WATANABE, Yōichirō

The *Saddanīti* is a work of grammatical literature written in Pāli, composed by Aggavaṃsa in Burma in the twelfth century. Aggavaṃsa sometimes indicates the purpose of grammatical literature in the *Saddanīti*; however, these descriptions are not considered comprehensive. For this reason, in this paper, I try to survey the understandings of Aggavaṃsa on this subject, and, consequently, the purpose of his writing. To begin with, introductory verses of the treatise clarify the purpose of the composition of the *Saddanīti*. Summarized in the description, Aggavaṃsa states that studying grammar leads, in turn, to exact understanding of canonical texts, the right way of training, and deliberation. According to the above-mentioned passage, Aggavaṃsa seems to relativize the importance of grammatical literature, even though he is just about to begin composing a grammatical text. Moreover, we find that, in some cases, he holds grammatical literature in low esteem, reprimanding students who indulge in the study of grammatical treatises, without respecting the Buddha's teaching. On the other hand, Aggavaṃsa believes that canonical texts express the absolute truth. For him, the Pāli texts, spoken by a person who has *niruttipaṭisambhidā* (analytic knowledge of the expression of words), cannot contain a single grammatical mistake. In other words, unenlightened people, including Aggavaṃsa himself, cannot grasp the description of the Pāli texts completely when attempting to analyze them. Consequently, any grammarian who does not achieve spiritual enlightenment cannot compose faultless treatises of grammar. Therefore, if a student relies only on a book of grammar, without availing himself to the canonical texts, he cannot attain any correct understanding of the Pāli texts. This concept probably guides the style of the *Saddanīti*. Aggavaṃsa does not believe that he has the ability to understand fully, for the above reason; rather, he sometimes summarizes views of previous grammarians, or urges readers to investigate and reconsider their own theories through intensive reading of the Pāli texts. In conclusion, Aggavaṃsa attempts to make the Pāli grammar more demonstrative by basing it on the Pāli texts.